

■ 今月の特選句 八木健選

衣被ぎ脱がせ上手の男かな (有吉堅二)

滑稽句は、DNAに俳諧の工口チリズムがある。
昭和以降、女性が俳句をつくるようになって、
ご法度になっていたから敢て特選とした。

八年後ばれたる柿の氏索性 (金澤 健)

「実生(みしょう)」ですね。柿を食べて甘いからと
種から育てたら、渋柿だったとはよくあること。
「一年後ばれたる吾子の実の父」…季語がない。

「がぎぐげご」田んぼに学ぶ活用形 (久我正明)

蛙の声を活用形とした句に初めて出会った。
脳味噌が柔らかいと、こういう句ができるね。
「お得意がガ行だけとはカエルさん」。

禪のしよつちゆうずれて草相撲 (麻生やよひ)

子どもでしょうね。オジサンでしたら、
「猥褻物陳列となり草相撲」で許せないかも。
「禪のはずれてしまひ草相撲」では困るねえ。

言ひ訳を酒に語らず牧水忌 (種谷良二)

牧水の歌の「雅」を「言ひ訳」という「俗」で裏切った
手法を買いたい。でも下戸なら「下戸ゆえに言ひ訳
できず牧水忌」。ありやりや。

首たてに振らざる妻と扇風機 (永島董玉)

妻と扇風機を同列に扱っているのが可笑しい。
「あるのかな首たてに振る扇風機」。だからさ、
「かあちゃんはエアコン前で首を振る」となる。

■ 今月の秀逸句 七七をつけてみました

村芝居セリフを客が先に言ひ (前川敏夫)

・・・余計なお世話と喧嘩にもなり

黒揚羽どこかで儀式ありしかな (稲沢進一)

・・・黒装束の悠揚として

箸置きにころんで止まる衣被 (越前春生)

・・・止まらなくてもかまへんかまへん

見破られパートの幽霊叩かれる (岡部一兆)

・・・なんだお前か脅かしやがつて

年取っても共産党よ赤のまま (伊藤浩睦)

・・・一物仕立てならば季語なし

走り箸食べて進軍ラッパかな (三木蒼生)

・・・屁の字使はず臭ひぬるかな

熟れ頃を尻たたかれて西瓜かな (中岡久美子)

・・・拳句の果てに食ひ散らかされ

真似てみてそれぞれ違ふ河鹿笛 (山本 賜)

・・・江戸屋猫八顔負けもみて

DNA継がずビリ等運動会 (横山喜三郎)

・・・せめて俳句の遺伝継がせよ

いつも来る蝶今日からは秋の蝶 (井口寿々子)

・・・蝶自身には自覚はあらず

雲の翳をこんがり焼くや秋夕焼 (高橋素子)

・・・備長炭の火加減上手

寝転んでリモコン使ひ終戦日 (日根野聖子)

・・・平和の二文字身に沁みてゐる

何もかも省略利かす残暑かな (飯塚ひろし)

・・・自身は省略対象外に

青山桂一

青鷺の妖しの姿秋河畔

夏逝きて小児歯科医一休み

秋風を身に着けながらウォーキング

秋月裕子

熱中症防ぐ塩濃きサラダ食ぶ

秋立つや有耶無耶老人増殖す

鈴木哲也

風涼し道でみつけた赤とんぼ

鈴虫が草むらの中リンリンと

秋深しノコノコ歩くカメさんよ

高田敏男

甚平着て少し世の中遠ざかり

お多福に絡むひよつとこ村芝居

玉碎に裏あり平和にも裏ある残暑

麻生やよひ

禪のしよつちゆうずれて草相撲
盆莫座の持ち主海螺は負けばかり
灯の消えて強面ねぶたの空威張り

足立淑子

鶉が聞く人に生まれて幸せか
百歳も口をすぼめて千歳飴
主語のないメールが届く秋祭

有富洋二

はちまきの父も転がり秋の空

眼鏡して目薬点して秋時雨
犬散歩廻り道して良夜かな

有吉堅二

マドンナは今もマドンナ敬老日
夜這星とききてためらふ願ひごと
衣被ぎ脱がせ上手の男かな

安藤淑子

喫煙の夫の血液蚊も嫌ふ
私よりずつとお洒落な案山子さん
酷暑にて滑稽俳句も不作なり

飯塚ひろし

何もかも省略利かす残暑かな
神官の頭が好きな赤蜻蛉
貼り紙の誤字正しをる秋暑かな

井口寿々子

いつも来る蝶今日からは秋の蝶
かなかなの余韻いつまで茜雲
木洩れ日の肌にやさしき今朝の秋

井口夏子

群れ蜻蛉特攻体制整へり
朝顔の登りつめても左巻き
鳳仙花弾けて飛んだ恋だった

伊藤浩睦

新豆腐自殺未遂に角崩れ
盆燈籠百二十歳の母旅行中

羅に作り話の見え隠れ

高田菲路

入道雲育つボパイの胸にかな
これしきの暑には負けぬぞ戦中派
道問へばくれし南瓜や敗戦忌

高橋マキコ

敬老の日は他人事と父母は
夕焼けや蛍光ピンクの雲見つけ
満月や正体見たりウロコ雲

高橋 都

秋風や喜怒哀楽はツイッター
牛蛙じつと見ている盆の月
屈みても片蔭はみ出す大男

高橋素子

雲の翳をこんがり焼くや秋夕焼
名残味骨まで愛する焼秋刀魚
神様の目の毒半裸の肉体美

高松雄三

短パンにスカート絡む盆踊
油蟬死してふとつばら天を衛く
おの我手のしわしわしわに敬老日

田中章子

運動会坊や案ずる父のゴール
天を突き緑の角のをくら生り
嫁のため紅なるしつぽの赤とんぼ

田中 勇

銀漢やクングリニーの覚醒す
織姫や心臓のチャクラを観たる
銀漢を幽体離脱するにけり

谷 陸海

リモコンを家族で探す文化の日
来賓の逃げ足早き運動会
秋暑し勘弁してよ日本一

種谷良二

気に食はぬ秋刀魚の腸を食はぬ奴
言ひ訳を酒に語らず牧水忌
とろろ汁酒に爛れし胃に落つる

年取つても共産党よ赤のまま

稲沢進一

黒揚羽どこかで儀式ありしかな
冷蔵庫賞味期限を疑はず
夜霧ふと裕次郎になりけり

井野ひろみ

「暑いね」と言いつつ唯も痩せ知らず
早起きの夫騒々し蝉時雨
夫婦けんか暑さ二倍で行き場なし

越前春生

へそくりを定期預金に敬老日
箸置きにころんで止まる衣被
一輛目に慌てて乗りし厄日かな

岡部一兆

見破られパートの幽霊叩かれる
俺様も元氏族だと利き酒会
曼殊沙華我も歯はなく燃えてゐる

奥脇弘久

葡萄狩ワイナリーへと気が急きて
敬老日紙幣一葉賜りぬ
秋霖や出口の見えぬ路地を往く

笠 政人

ほくほくとぼつくり寺へ道をしへ
吸血の間髪いれぬ蚊の夕餉
子かまきり頂すつくと威文高

可知豊親

夜なべ妻昼間ぐつすり寝たと言ふ
ぶつくさとまた始めから夜長人
むしやむしやと松虫の夫喰はれけり

加藤澄子

落蝉や喚き散らした翌朝の
熱中症がダシとなりたるかき氷
極太のみみず干上がる恐れある

加藤 賢

底紅や十七の子と背くらべ
ひい孫に恋の手ほどき生身魂
わが顔を覗き唾蝉遁走す

田村米生

朝立の期待はづれや夕立待つ
羽抜鶏歯抜爺を追ひ回はす
生身魂惚けた振りして人試す

飛田正勝

隠し味決めて夫の夏料理
コンビニで足りる馳走や敬老日
BMI少し肥満や残る夏

中岡久美子

敬老日アンチエイジングで生きてみ
る
経かたびらお化け屋敷で見る長寿
熟れ頃を尻たたかれて西瓜かな

永島董玉

首たてに振らざる妻と扇風機
辻褄を無理矢理合はず生ビール
籠枕ひよいと魂抜けだして

西をさむ

撫でられて叩かれ西瓜赤くなる
唐辛子滅法意固地臍曲り
名にし負う弁慶草の立ち姿

原田 暉

片蔭へ急ぎ駆け込む己が影
孫の手に恃む汗疹の背中かな
噴水の真上の空に見えぬ壁

彦阪義久

永田町議事堂に咲く振り花
汗流す夢ばかりなり半夏生
白日傘大局してをり黒日傘

久松久子

きみまろのCD届く敬老日
卓袱台の取り合ひつこして夏休
芥子坊主ゲゲゲの鬼太郎潜みをり

日根野聖子

秋の蝉恨みたらたら言ひ足らぬ
寝転んでリモコン使ひ終戦日
台風狙はれてゐる憂ひかな

金澤 健

親不孝きちんと裏も墓洗ふ
目に付かぬ暮し夢見る案山子かな
八年後ばれたる柿の氏素性

川島智子

酷暑猛暑炎暑ついに死暑
をみなさす日傘をのこもさしにけり
揚花火戦闘とみる宇宙人

北村マコ

両の手で日傘ささえつ坂上る
琉球の夢持ち帰る日焼け子ら
控えにも心意気あり冷奴

久我正明

「がぎぐげご」田んぼに学ぶ活用形
噴水のためらいためて頂点に
ほうたるの尻に火の着き逃げ惑う

工藤泰子

熱中症の鼓膜に蝉の腹震ふ
空蝉やロボットスーツ進歩して
灸花国治めんと絡みつく

黒澤正行

墓に噛まれすじりもじりの青大将
父の着し国民服の案山子かな
風評は風に流して猫じやらし

黒田忠一

気象庁雷雨予報は身の予防
熱帯夜無駄な抵抗してみます
この際だ冬迄ネバレ熱帯夜

齊藤八兵衛

特大のピアスが似合う種雄牛
口車怖い車だ眉に唾
茗荷食べ冥加にあまる物忘れ

酒井鹿洋

昔よりエゴはありけり日向水
子規まねて横臥の駄句や癩祭忌
お中元吾が家素通る配達車

藤岡蒼樹

角切りの寝技四の字固めして
血糖値告げられてみて今年酒
ロケットの発射噴く焰や秋燕

藤原セツ子

葉脈の路地の地図這ひてんと虫
青田中白蛇のごと新幹線
介護てふ闇をうろうろ熱帯夜

坊野念寿

曼殊沙華脚線競ふ芽立ちどき
白芙蓉酔ふてもメはしとやかに
メ切るぞ早くしないか鉦叩

前川敏夫

ゴキブリに驚く顔に驚けり
村芝居セリフを客が先に言ひ
相続セミナーに通ひ生身魂

松尾軍治

験かつぎ稽古不足の相撲とり
美人きて積きころぶ残暑かな
札幌を泡で旅立つビールかな

丸山紘一

暴れ梅雨ぞ知らぬ顔で明けにけり
幽霊に年金の国夏盛り
御器噛のそこここに果つ極暑かな

三木蒼生

神の留守佛へ願を町工場
肅々とどんぶり飯を食べて秋
走り諸食べて進軍ラッパかな

村上美和

大食の理由は子育て秋高し
島涼し農薬散布のスピーカー
兄弟の母を取り合う水鉄砲

百千草

いぢめつこ避けてとる道赤のまま
郎党の一網打尽油虫
真夜中のをみなご百合の香を放つ

桜井宇久夫

洒落にならぬ秋刀魚祭の殺気かな
共に貧新酒の夢を奪ふ下戸
秋彼岸地獄絵の寺待ちてをり

佐藤古城

でかい女を先頭として露の路
子を夫と誤り蚊帳の大女
磴登る見事な御居処どっこい暑

佐藤義子

飛行機雲残し息子出張へ
夏すわり秋虫陰で出番待つ
残暑より酷暑が似合うこの夏よ

佐野萬里子

天高く海煌ける大王埼
大わらじに二尾の稚鯿を神選として
ダンダラボッチもひるみしわらじ浦祭

澤田薫恵

梨をむくむなしき政策聞き乍ら
違うはよと云えばそれまで秋の空
彼の岸へ軽やかに駆け茄子の馬

柴田真一

熱中症知恵に傳くアイパット
夜な夜なに男ひきよすスイカズラ
夏の列島周りの湯気にうなされて

清水吞舟

神童と呼ばれし事も木の葉髪
まくなぎの帰りにも来し停留所
引揚げの黴のリュックを捨てられず

首藤虎男

裏千家一服一茶ひとひねり
ワンコ蕎麦一声吠えず啜り食ふ
澤登り河鹿聞きつゝ夢見滝

壽命秀次

ダイエット本を枕に昼寝妻
リズムよく扱く胡爪や赤い爪
水草を夫婦金魚にプライベート

森岡香代子

花火師の罨にはまつて灰かぶる
大空を泳いでみだれうろこ雲
下駄の音殺して前へ盆踊り

森 要

婆々在所風鈴おとも爺々の盆
羨まし無口で慕う蟬の妻
禿で夫が入道雲見て背で泳ぎ

八木 健

稔るとはぶらさがること夏蜜柑
引つ張つて天よりおろす山アケビ
揃ひ踏みムカデの脚のぞろぞろと

安居雅寿

案山子立つ無手勝流の構へなり
ごきぶりを追ふて夫婦の黙解ける
日の射して紅葉万華の雨雫

柳澤京子

蚊の止まる老母の足の吸血鬼
いが栗のほつこら顔出す一つの絵
子守歌のごとく鈴虫夫ころりん

山下正純

煉獄に今朝も至りぬ熱帯夜
後の世は煉獄行きか熱帯夜
首振れど凝りは取れぬか扇風機

山本あかね

ブブゼラの喧騒去りて星月夜
夏痩せの眼鏡を鼻にのせ直す
夜の秋やこの遺伝子は父方の

山本けい子

祝婚の花火の映り筑後川
冷やし水ごくごくごくごく墓掃除
一晩で葉脈だけの青紫蘇に

山本 賜

真似てみてそれぞれ違ふ河鹿笛
ペンギンと並んで写り夏休み
まじまじとみれば蜘蛛だった糸屑

白井道義

マネキンを裸にしたい油照り
叩かれて抱き締められてゐる西瓜
遺言書書いては破る生身魂

鈴木和枝

無職です蝉存分に鳴いていい
苦瓜と同じ高さで老後の夢
自転車のうしろにピッタリ入道雲

鈴木 榮

ごきぶりに妻の眠れる技一打
片道を徒歩の一駅生ビール
助六の案山子にとまる烏かな

横山喜三郎

DNA継がず一等運動会
得々と美女を借り物運動会
にこやかに版旗を隠し生身魂

渡辺さだを

猫どもも死んだふりする猛暑かな
くねくねと臍出しルック水着ショウ
かき氷日本列島亜熱帯

渡邊美代子

霧の海蜃獲く人手を振りて
となりより安来節聞こゆ菊の宿
丑の日や九字切る宮司の声太し